新聞記事
（最近の動向）

出前カラオケ 結ぶ絆

福島 仮設へ100回 笑顔の輪

避難生活のストレスや不安を歌で吹き飛ばしてもらいたい――。そんな思いから、福島県内の仮設住宅にカラオケセットを貸し出すボランティア活動を続けている男性がいる。「出前」は約100回を数えた。カラオケが避難者同士の距離を縮める。

同県会津若松市で居酒屋を経営する川副憲雄さん(65)。昨年3月の震災の時は、居酒屋やスナックが加盟する県社交飲食業生活衛生同業組合の理事長だった。「自分たちだからこそできる支援がある。気晴らしに歌を歌いたい避難者がいるはずだ」と、カラオケを思いついた。

8月、組合でバスを借りて仮設の訪問を始めた。最初はバスの中でカラオケを歌ってもらったが、バスの調達が難しくなったため、9月ごろからは業者からカラオケの機材を借り、仮設の集会所に届けている。

口コミで評判を呼び、各地の仮設の人たちから求めが相次いだ。これまで約20カ所を回り、訪問回数は100回ほどに。会場では機械に不慣れな人のために川副さんが曲を入力する。店の仕事はおろそかになりがちだが、「待ってくれている人がいる」と家族に言い含め、仮設回りを続ける。

1月中旬の昼間、浪江町の住民が避難する本宮市の仮設の集会所に昭和の歌謡曲の歌声が響いた。デュエットする夫婦に、集まった約30人から冷やかしの声が飛ぶ。新年会を兼ねたカラオケ大会。川副さんは10月からほぼ月1回、この仮設を訪問している。

武田セツ子さん(75)は4曲こなし、笑顔を見せた。一人暮らし。近くに買い物ができる店や娯楽施設はなく、寂しさが募っていた。「カラオケの日を楽しみに頑張っています。いつ町に帰れるのか不安だけど、今を楽しまないと」

入居する25世帯はもともと別々の地区の住民。避難後これだけの住人が集まったのは初めてで、自治会長の渡辺洋さん(64)は「住民同士どう支え合うか悩んでいた。カラオケが、仲良くなるきっかけになった」と喜ぶ。

カラオケ機材のレンタル代にあてている国の補助金が、年度いっぱいで終わる。川副さんは機材の購入を考えているという。

（井上裕一）

仮設住宅の集会所でカラオケをデュエットする福島県浪江町の住民と、手拍子する川副憲雄さん（右）＝福島県本宮市、山本裕之撮影

2012年1月26日（木）東海新報

全国初、仮設クリーニング工場

厚労省が補助　被災4事業者で共同利用

東日本大震災津波で被災したクリーニング事業者たちが共同利用する「復興支援仮設クリーニング工場」が、大船渡市に開設された。厚生労働省の震災復興枠の補助金を活用した全国初の形態で、被災地の復興モデルとなる。

仮設工場は、全国クリーニング生活衛生同業組合連合会（吉山守会長）が、被災地の公衆衛生の確保と被災した事業者の営業再開を促すため、厚労省の平成23年度生活衛生関係営業対策事業費補助金を受けて開設した。

共同利用するのは、大船渡市の㈱広進（古澤淳代表取締役）、新沼クリーニング（新沼重男店主）と、陸前高田市の高橋ランドリー（高橋國雄店主）、高田クリーニング（河野通信店主）の4事業者。いずれも津波で店舗や工場が損壊、流失した。

開設場所は盛町字内ノ目地内。建物と土地は広進の所有で、浸水した工場を自力で補修し、今回の共同利用のために提供した。

全国連合会が受けた補助金は約3400万円。仮設工場にリースの機器一式を無償貸与し、ドライクリーニング機、乾燥機、スチーム仕上げ機、ズボンプレス機、上着立体仕上げ機、ワイシャツ仕上げ機などが整備された。

4事業者は独立経営で、それぞれの顧客から預かった品物を工場に持ち込み、各自の技術で処理、仕上げる。

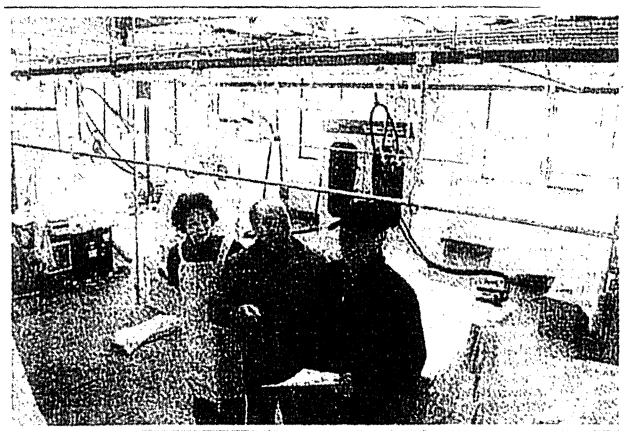
保健所の開設許可が下り、来月からの本格稼働に向けて試運転を行っている。

県の同業組合理事長を務める古澤さんは「仮設工場を連合会に要望し希望の光ができた。他の地域でも可能にするためにも、ここは絶対成功させたい」と話す。

仮設住宅に入居中の高橋さんも「父の代から70年続いており、いったんは諦めかけた。いい仕事をして震災で受けた恩をお返ししたい」と共同で再スタートに臨む。

全国連合会では「共同で利用する形態の仮設工場は全国で初めて」とし、被災県で今後進める際のモデルケースになるとしている。

来月4日の開設披露式典から本格稼働する。



本格稼働に備える仮設クリーニング工場＝大船渡市盛町